

聖書：ルカ 21：5～19

説教題：忍耐によって

日時：2012年11月18日

宮がすばらしい石や奉納物で飾ってあるのを見て感嘆の声を上げている人たちに対してイエス様は言われました。「あなたがたのしているこれらのものが崩れ去る日が来る」と。当時の宮は、いわゆる第2神殿を増築拡張したもので、その工事は紀元前20年頃から紀元64年までかけてなされました。ここで言われている「石」とはおそらく神殿に立ち並ぶ白い大理石の円柱を指しているのでしょうか。また「奉納物」とは具体的に何を差しているか分かりませんが、当時の神殿にはヘロデ大王が寄贈した純金製のぶどうの木が飾られていた、とされています。それは一つの房だけで人間の背丈ほどもあったと言いますから、どんなに人々の心を引き付けたか想像に難くありません。ユダヤ人は神殿に来るたびに、これらのものを見、心の底でこんなにも豊かで、祝されている神殿が私たちの内にある、ということに安心と満足感を持ち、心のよりどころとしていたのではないのでしょうか。そんな神殿を指して、イエス様が「石がくずされずに積まれたまま残ることのない日が来る」と言われたのですから、たユダヤ人たちには大変衝撃的な言葉だったわけです。

しかし落ち着いて考えれば、イエス様は何も突飛なことは言っていません。形あるものは崩れる。どんなに立派な建造物でも、時間が経てば古びて、壊れる。それだけのことです。その当たり前のことがショックに聞こえるのは、それだけ彼らが目に見える神殿に自分の心を置いているからでしょう。あるいは私たちもこの世の豊かさ、また人間の英知とそれが作り出したシステムに寄りかかっているからでしょう。ですからそれが取り去られ、なくなる日が来ると言われると、突然慌てふためく。さらには後の33節では「この天地は滅びます。」とまで言われます。私たちは果たして、その日が来ても大丈夫な生活をしているのでしょうか。

人々はイエス様に「先生。それでは、これらのことは、いつ起こるのでしょうか。これらのことが起こるときには、どんな前兆があるのでしょうか。」と質問します。それに対するイエス様の答えを見ていく時に分かることは、ここにはエルサレム神殿崩壊のことと混じり合うようにして「この世の終わり」のことも語られていることです。このことが今日の箇所を解釈を難しいものにしていきます。一体どれがエルサレム神殿崩壊に関するもので、どれが世の終わりに関するものなのか。またもある部分は両方に関するものなのか。これは、聖書によく見られる預言の方法です。実際に二つの出来事の間には、長い時間の隔たりが存在するのに、それがまるで一つのところにあるかのように語る方法です。私たちも似たような経験として、高い山々を遠くに眺めた時、本当はその山と山との間にはかなりの距離があるにもかかわらず、まるでお互いがす

ぐ近くで重なり合っているように見える、ということがあります。先日の日帰りリクリエーションの時も、見晴らし台から遠くの山々を眺めましたが、――残念ながら富士山は見えませんでした、――いくつもの山々が重なって見えました。それらの山々の間にはかなりの距離があるのですが、こちらから見ると同じところに並んでいるように見える。イエス様はそのようにまず近い将来のエルサレム神殿の崩壊という一つのピークを見ていますが、同時にその背後に重なって見える世の終わりの出来事についても一緒に語っておられるのです。

これは旧約の預言についても同じです。たとえばヨエルは、終わりの日に聖霊がすべての人に下り、青年は幻を見、老人は夢を見ると預言し、それがペンテコステの日に成就しましたが、それは同時にやがての完全な救いの日について描いているものです。あるいはイザヤ書 13 章はバビロンの滅亡を預言しつつ、同時にそこで最後の審判も重ね合わせて見えています。そのようにイエス様もここで「エルサレム神殿崩壊」とセットで「この世の終わりのこと」も語っておられるのです。

このことを押さえて、以下のイエス様の言葉を 3 つのポイントで見て行きたいと思えます。まずイエス様の最初のメッセージは「惑わされないように！」ということ です。8 節以降に様々なことが語られています。自称メシヤが現れる。戦争や暴動の噂を聞く。また民族や国同士の対立、大地震、疫病や飢饉、等々。私たちはこれらを今日の様々な出来事に当てはめて、だから世の終わりは近い、と慌てやすい。しばらく前も自らを救い主と主張して凶悪事件を起こした教祖がいました。戦争はあちこちで起こっています。国同士の対立ということ言えば、日本も隣国と緊張関係の中にあります。また大地震と言えばまさに昨年の大震災を思います。しかしイエス様は何と言われたのでしょうか。イエス様のポイントは、これらは「初めに必ず起こること」であるということです。だからまだすぐには終わりは来ない。これはどういうことでしょうか。この世界は本来素晴らしく造られ、そこには何の混乱もなく、すべては美しく調和していました。しかし人間の罪によって、人間の上に罪の呪いが臨み始めたばかりか、この世界にも罪の呪いが臨み始めました。今なおこの世界は神の恵みによって、一気に破滅に至ることがないように保たれていますが、決してそれ自身では良い方向に向かわない。33 節の「この天地は滅びます」と言われている通り、壊れて行く方向に進みます。そこに神のさばきが現れます。しかしただ壊れるというのではなく、神はそのさばきと聖めのプロセスを通して、やがて新しい天と新しい地を出現させて下さいます。ただしそのためには、「天は燃えて崩れ、地と地の色々なわざは焼き尽くされる」と II ペテロ 3 章に記されているプロセスを通って行かなければなりません。ですからこの世の終わりに向かうに連れ、様々な混乱が生じるのは当然なのです。それは初めに必ず起こるのです。そのことを心に留める私たちは、慌てない、誰かの後について行かない、そして恐がらない。それらは確かに世の終わりに向かうプロセス

の一部ですが、今すぐ終わりが来るのではないのです。私たちは心落ち着けて、かの日に向けての準備をして行けば良いのです。

ではこのような状況で私たちが心がけるべきことは何でしょうか。イエス様の第2のメッセージは「あなたがたはあかしをする」ということです。12節を見ると、あなたがたは会堂や牢に引かれて行き、王や総督たちの前に引き出される、と言われていきます。また16節では家族や肉親からも裏切られ、中には殺される者もある、17節にはみなの方に憎まれる、とあります。私たちとしては、こんな状況に置かれて証しをするなんて、私には到底無理！と思います。しかし素晴らしい約束があります。13節から15節：「それはあなたがたのあかしをする機会となります。それで、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておきなさい。どんな反対者も、反論もできず、反証もできないようなことばと知恵を、わたしがあなたがたに与えます。」王や総督の前に引き出されることは大変なことです。次の瞬間には殺されるかも知れない。また信じない人たちに囲まれ、信仰を否定しないと生きていけないような圧力を感じるかもしれない。しかしその時は、あなたがたがあかしをする機会となる。イエス様は「あかししなさい」と単に命じておられるのではありません。イエス様が共にいて、あかしができるように導いてくださる。だからあらかじめ考えるな！とさえ言われています。

これはもちろん、説教や何かのお話の準備をしなくても良いと言っている御言葉ではありません。神学生時代の説教演習の授業で、あるクラスメートが、聖霊が助けてくださると言っただけでメモさえ持たないで説教壇に立ちましたが、言葉が全然出て来ない。その内、本人の焦っている様子がありありで、それはそれは話している方も聞いている方も最悪の時間でした。その後の講評では、演習担当の先生から「もし実際の教会でそんなことをやったら、一回でクビだと思え！」と厳しく叱責されたのを覚えています。もちろん私たちは、できる準備はするのです。1ペテロ3章15節：「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」

しかし、危急の際、反対者たちに囲まれてどこにも助けがないと思われる時、私たちはそこでこの主の約束により頼むことが許されています。14節の「それで、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておきなさい。」とは、人間的な心配はいらぬという意味でしょう。孤立無援の状況でも、主が共にいて、話すべき言葉と知恵を与えてくださる。これは信じる者にとって何という慰めでしょうか。私たちは非常な困難の中でも、この主に目を上げて、そこで与えてくださる主の助けと導きに生きると召されているのです。

三つ目のイエス様のメッセージは「忍耐が必要」ということです。イエス様は反対者が反論もできず、反証もできない言葉と知恵を与えてくださいますが、それで相手が感動し、認めてくれるかという、必ずしもそうはならない。むしろ続く節には、両親、兄弟、親族、友人たちに裏切られ、中には殺される者もある、とされています。また、わたしの名のために皆の者に憎まれる、とあります。しかしそんな状況でも、素晴らしい約束が私たちに与えられています。18節：「しかし、あなたがたの髪の毛の一筋も失われることはありません。」これは一見、16節17節と矛盾しているように見えます。殺される可能性があると言われたのに、髪の毛一筋も失われないとはどういうことか、と。しかしこの18節は、より深い意味で言われていることは明らかです。イエス様は以前に「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。」と言われました。たとえ人が私の体を殺しても、神が私の魂を守ってくださいます。また天に備えられている私の祝福・富も少しも失われません。さらに私たちの「からだ」も、究極的な意味で守られています。やがて私たちは復活して、イエス様と同じ栄光の体を頂きます。ですから、主に信頼する者からは、髪の毛一筋も失われないというお言葉は確かに真実なのです。

この約束をしっかりと心に抱く時に、その人は初めて忍耐の歩みと導かれます。この忍耐とは、決して人間的な我慢とか頑張りのことではありません。それは信仰から生み出されて来る忍耐です。パウロがIテサロニケ1章3節で、「望みの忍耐」という言葉を使っていますように、人は望みを持つ時に忍耐できます。ここでも同じです。どんな困難の中にあっても、主が私を守り支えて下さる。この私からは髪の毛一筋も失われることがない。この約束を喜び、信じる時に、私たちはあらゆる状況の中で忍耐する歩みへと導かれるのです。またその忍耐の歩みをもって、私たちの信仰を現わすように導かれているのです。

世の終わりに向かう道のりには様々な混乱や苦しみがあると聖書は語っています。まさに天変地異と呼ばれるような現象も起こって行きます。しかしこの聖書に聞く私たちの幸いは、それは決してハプニングではないということ。それは予めここに言われていることであり、すべては神の支配にあるということです。そのただ中で、主に信頼して歩む私からは、髪の毛一筋が失われるということも起こり得ない。この御言葉を心に深く頂く時、私たちはあらゆる混乱の中で恐れることなく立つことができます。また共にいてくださる主により頼んで、今があかしをする機会であるという務めに励むように整えさせられます。そして自分の命が脅かされる状況を前にしても、忍耐をもってなお進んで行くという歩みができる。そうして永遠のいのちに至る道を最後まで踏み進むようにとイエス様は私たちに励まし、招いておられるのです。